

柏木試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 蜷川, 恭子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4651

柏木 試論

蜷 川 恭 子

序

光源氏のこの上ない栄華の極みを見せて語りおさめられた第一部の物語が暗転し、第二部の世界に入ると、その人物描写は一段と光を帯びて輝き出し、これまでには見られなかったような登場人物同士の精神的葛藤が鮮やかに描き出される。こうして、精神的深化を見せはじめる物語世界において、第一部ではほとんど固有の人格を語られることがなかった太政大臣家の嫡男、柏木がにわかに物語の前面に押し出されてくることになる。

「若菜上」巻以降、柏木は特色ある独自の存在として、新たな人間像を獲得し、その短い生涯に幕を下ろすまでの心の有り様は、作者によって雄弁に語られる。そこで本稿では、柏木の精神的推移を分析することによって、物語における彼の人生の意義を検証したい。個性的な人間像を付与された柏木が、晩年にさしかかる光源氏の物語に、なぜ必要とされたのかという問題は、重々しく様相を次第に強めていく第二部の主題を考える上でも避けては通れない重要性を

孕んでいると考えるためである。

また、『光源氏』の中には、いくつかの死の場面が描かれているが、柏木はそのような死の場面の描写を与えられた、物語中唯一の男性となる。作者によって人生の集大成とも言うべき死を描かれた柏木が、どのような役割を担って位置付けられたのか、彼の悲劇的とも言える一生を追うことで作者の意図に迫りたい。

一 垣間見

内親王であり、光源氏の正室として深閨に傳かれるべき女三の宮を垣間見のような機会は、通常では考えにくいことである。しかし、六条院での蹴鞠の際、思い掛けず、その姿が露になるのだ。ここに、作者がこの垣間見を現実化させるべく、その条件を整えていった一つの成果を認めることができる。

そして、この垣間見は今まで語られてきた柏木という人物の範疇を大きく逸脱し、彼の人生の方向性が決定付けられた転機となった。

よつて、本章では、作者によつて計算された女三の宮の垣間見が柏木に及ぼす影響を考え、揺れ動く柏木の精神状態を検証する。

(一) 女三の宮の婿選び

光源氏に至上の幸福を用意した「藤裏葉」巻により、物語は終幕の時を迎えたかのように思われたが、作者はまた新しい物語を語り出すのである。新しい物語は、病篤い朱雀院が出家の思いに駆られ、それにつけて気掛かりとなる鍾愛の娘、女三の宮の行く末に頭を悩ませるといふ深刻な話題ではじまる。結局、女三の宮は光源氏のもとへ降嫁することになるのだが、朱雀院の内意が光源氏に固まるまで、婿選びは混迷を極め、朱雀院は苦慮を重ねることになる。

そんな朱雀院の柏木に対する評価は、次のようなものであった。

高き心ざし深くて、やもめにて過ぐしつ、いたくしづまり思ひあがれる気色人には抜けて、才などもこともなく、つひには世のかためとなるべき人なれば、行く末も頼もしけれど、

(若菜上)

柏木は学才に優れ、いずれは政界の中心となるべき人物として将来を大いに囑望されていることがわかる。そして、ここで注目すべきは、第一部では明らかにされなかった、皇女を妻に得たいと強く望む気位の高さが紹介されることである。これまで、柏木は太政大臣家の嫡男として、割り当てられた役目を果たす好青年ではあるものの、具体的かつ詳細な人間像を描かれることはなかった。しかし、

今回、女三の宮の婿候補として俎上に載せられた時、彼の野心家としての一面が表に押し出され、彼の個性が浮かび上がってくるのである。

また、こうした野心家としての柏木を父太政大臣も力強く後援する。皇女を妻に得たいと願い、女三の宮の降嫁を望んだ柏木の「高き心ざし」は、彼個人がひとり勝手に有しているものではなく、父太政大臣にとつても心に掛けて願うことなのである。もし実現すれば、これほど一門の名誉となることはないのである。柏木の「高き心ざし」は父の願いとも相応して支えられ、第二部における柏木像の中心的な要素となる。そして、この新要素には、柏木を女三の宮に對する盲目的な恋に突き進ませ、情念の虜へと変貌させる力があるのだ。つまり、柏木の野心的な一面は、彼の人生の中枢をなす密通事件への明らかな布石としての役割を帯びていると考えられるのである。

婿選びでは、位があまりにも低いことから、他の候補者ともども光源氏に一蹴されてしまう柏木であるが、その失意や落胆は一切語られず、物語の世界は柏木の視座に立とうとはしない。柏木が女三の宮の婿となり得なかったのは、第一部において父太政大臣が、常に光源氏に圧倒されてきた歴史を引き継ぐものであり、当然のことであるかのように、柏木もその心中を語られることなく、敗者として処理されてしまうのである。

一方、女三の宮という存在を得て、光源氏の六条院世界には亀裂が生じはじめる。特に光源氏と紫の上の関係において、深刻な分裂

乖離の状態が作りあげられることになったのだ。こうして、六条院世界に異変が生じることで、第二部に入って柏木が特色ある独自の個性を持つ意義が生まれてくるのである。

この柏木の特色ある個性が、次に表面化してくるのは、「若菜上」巻の巻末近くになってからのことになる。その間、明石一門の立身譚が語られ、それに伴い、明石の女御の養育に当たってきた紫の上の徳望が称揚される物語の中で、六条院の正室である女三の宮は物語の世界から除外されていく。その女三の宮が夕霧によって再び語り出される時、夕霧の対峙者という形で柏木もまた、物語に呼び戻されることになるのである。

(二) 柏木と夕霧

夕霧は女三の宮との結婚を考えないでもなかったもので、自然、無関心ではいられない。何かの用向きに託けて、密かにその様子を観察しているのであつた。その内に、女三の宮はただただ、「いと若くおぼきたまへる一筋」(若菜上)で、光源氏の厚遇に釣り合う人物ではないと見て取るのである。そして、光源氏がこの宮に対して特別に深い愛情を持っているという訳ではなく、世間体を繕っているだけだとその内情を理解するようになる。こうした事情を知った夕霧は、幼い女三の宮と比較し、改めて理想の女性、紫の上への関心を深めていく。それ故、夕霧には女三の宮に対する大それた気持ちは起こり得ないのである。

次に、このような夕霧の対峙者として、物語の表舞台に再登場する柏木に目を向け、その思いを本文を引用しながら検証する。

衛門督の君も、院に常に参り、親しくさぶらひ馴れたまひし人なれば、この宮を父帝のかしづきあがめたてまつりたまひし御心おきてなどくはしく見たてまつりおきて、さまざまの御定めありしころほひより聞こえ寄り、院にもめざましとは思ひのたまはずと聞きしを、かく異ざまになりたまへるは、いと口惜しく胸いたき心地すれば、なほえ思ひ離れず。(若菜上)

ここに、いまだ、女三の宮を諦めることができずにいる柏木の姿が描かれている。また、「院に常に参り、親しくさぶらひ馴れたまひし人なれば」と朱雀院との親しい関係も新事実として付け加えられ、女三の宮へと柏木の心が傾いていく必然性が示される。彼が誰よりも強く、この宮に固執する理由付けが行われるのである。こうして、柏木の女三の宮思慕には、ただならぬ執拗さが芽生えはじめていくことになる。

「対の上の御けひには、なほ庄されたまひてなむ」と、世人もまねび伝ふるを聞きては、かたじけなくとも、さるものは思はせてまつらざらまし、げにたぐひなき御身にこそあたたらざらめ、と常にこの小侍従といふ御乳主をも、言ひはげまして、世の中定めなきを、大殿の君もとより本意ありて思しおきてたる方におもむきたまはばとたゆみなく思ひ歩きけり。(同)

女三の宮が紫の上の勢いに圧倒されているという噂を聞き、自分が宮を得ていたならば、と思いを巡らす柏木が描かれている。光源

氏が出家でもすれば、と機会を窺う柏木の姿からは、彼の立場に相応しい分別を認めることはできない。皇女を妻にと考えてきた柏木にとって女三の宮は、朱雀院が特に大切にしてきたという点で、他の皇女とは比べようもない存在なのである。そんな女三の宮を妻にしたにも拘らず、光源氏の愛情は薄いと言う。これは、柏木にとって憂うべき仕儀であり、到底納得いくものではない。六条院において、女三の宮を取り巻く状況が不当なものであるとしか思えない柏木の中では、女三の宮への執着がより一層激しさを増していくのは必定であつた。

夕霧と柏木の物語における関係は、女三の宮との関わりで見るとき、両極の立場を取っている。そして、対峙者として夕霧が存在すること、柏木の女三の宮への傾倒はより鮮明に我々読者に印象付けられるのである。また、伊藤博氏は、情念の人へと柏木がその性情を移行していく道程について、

野分によつて点じられた狂熱の炎が、夕霧からその友柏木に、
対象を変えて転移されたものであろう。^(註2)

と評しているのも興味深い。かつて、紫の上を垣間見、禁じられた情念に心を乱して、光源氏の六条院世界の秩序を犯すのではないかと思われた夕霧が、分別ある人間へと立ち戻ったのと入れ違いに、女三の宮に異常なまでの執心を持つ柏木が語り起こされる、その点から考えても、夕霧の情念は柏木へと移動していったとみて間違いないであろう。ここに至って、柏木と夕霧を待遇的に描いた作者の意図も明確に読み取ることができるのである。

(三) 蹴鞠の日

一途に女三の宮を思い続ける柏木。また、徐々に軽薄な姿が明らかになる女三の宮とその女房たち。こうした物語世界の動きに、我々は何か危ういものを感じずにはいられない。そして、そうした不安は的中することになる。春、三月の晴れた日に六条院で行われた蹴鞠の催しは、柏木にとって運命的な出来事となるのであつた。

蹴鞠の技量を遺憾無く發揮する柏木の姿が描き出され、彼の存在は、ここにおいて大きくクローズアップされる。これは、柏木がこの後起こる劇的な出来事の中心人物となることを暗示していると言えよう。

蹴鞠を一休みしていた柏木は、女三の宮の御前の方を横目で見る。そんな時、唐猫の綱によつて御簾が引き開けられ、女三の宮の艶やかな姿を垣間見るといふ思い掛けない出来事が起こつたのであつた。柏木にとって、この垣間見がどれほど衝撃的な出来事であつたかは言うまでもない。

わりなき心地の慰めに、猫を招き寄せてかき抱きたれば、いかうばしくてらうたげにうちなくもなつかしく思ひよそへらるるぞ、すきずきしきや。(若菜上)

女三の宮に対する理性を超えた情念に取り付かれている柏木の様子が描かれている。柏木は猫を抱き上げ、その可愛らしく鳴く様子を女三の宮に準えずにはいられないのである。この垣間見が柏木の

恋を盲目的に、彼が常軌を逸していく決定的な切っ掛けとなったことは疑うべくもない。

しかし、この時、柏木と共に女三の宮を垣間見た夕霧は事態を冷静に受け止め、女三の宮とその女房たちの軽率さを非難し、そして、柏木の心を見透かす観察者としての立場も確立する。無二の親友である二人は、決定的に道を異にしていくのである。

柏木と夕霧、両者の相違を確認したところで、垣間見後の柏木の様子に目を向ける。

よろづの罪をもさをさたどられず、おぼえぬ物の隙より、ほのかにも、それと見たてまつりつるにも、わが昔よりの心ざしのしるしあるべきにやと契りうれしき心地して、飽かずのみおほゆ。(同)

柏木は、「わが昔よりの心ざしのしるしあるべきにやと契りうれしき心地」がしたという。何とも身勝手な解釈である。こうした柏木の思い込みから、この先、密通事件が引き起こされることが予想されるのだ。

(四) 柏木の情念

柏木の急速に深化する女三の宮への恋情を知る由もない光源氏は、上機嫌でこの日の蹴鞠の立役者であった柏木に冗談を言い掛ける。

柏木の蹴鞠の技量を褒めちぎるのである。柏木、そして太政大臣家を称える話しぶりではあるが、つまりは蹴鞠以外のもので自分が引

けを取るものは何一つないことを高言しているにほかならないのだ。光源氏の冗談には鋭い棘が潜んでいるのである。

この冗談を聞く柏木は、光源氏に太刀打ちできない自らの臍甲斐なさを痛感したことであろう。現に、女三の宮の婿選びでも光源氏に敗北したのである。そして、今、玉上琢彌氏が、「もはや個人の問題ではなく、両者の優劣を決定する言い方だ」と評する毒のある冗談を口にした光源氏の姿は、若い柏木から見ても、いかにもつやつやとして美しい。

かかる人に並びて、いかばかりのことに心を移す人はものしたまはむ、何ごとにつけてか、あはれと見ゆるしたまふばかりはなびかしきこゆべき、と思ひめぐらすに、いとどこよなく御あたりはるかなるべき身のほども思ひ知らるれば、胸のみふたがりてまかでたまひぬ。(若菜上)

つい先程まで、柏木の内燃え上がっていた女三の宮への激しい感情と、その思いが報われるのではないかと興奮は一瞬にして消え失せ、女三の宮が自分に心を移すようなことはないと思う絶望感と、光源氏に対する痛烈な劣等感が押し寄せてくるのである。

しかし、女三の宮への情熱は、彼の心から離れることはない。叶うべくもない光源氏の威厳を思い知った柏木であったが、もはや彼にはその現実を理性的に処理し、自分の心内に潜む情熱を抑制することはできないのである。暴走しはじめた彼の情熱が顕著に見られる、六条院から夕霧と同車して退出する際の発言を抽出することに

院には、なほこの対にのみものせさせたまふなめりな。かの御おぼえのことなるなめりかし。この宮いかに思すらん。帝の並びなくならはしたてまつりたまへるに、さしもあらで屈したまひにたらむこそ心苦しけれ(同)

柏木は、女三の宮に対する光源氏の処遇が不当であると訴えはじめる。女三の宮より身分の劣る紫の上の処遇の方が手厚いという点が、柏木の不満とするところなのだ。夕霧にその訴えを否定され窘められても、彼はさらに語気を強めて女三の宮の不遇を力説する。

いで、あなかま、たまへ。みな聞きてはべり。いといとほしげなるをりをりあなるをや。さるは、世におしなべたらぬ人の御

おぼえを。ありがたきわざなりや(同)

情念の虜となつた柏木の激しい熱情が、そのまま転化したような語気の強さである。自らの思念にのみ従順な柏木の姿が描き出されている。

柏木の訴えは、女三の宮がその身分に相応しい待遇を得ていないということを核として、彼の感情の高揚と共に、光源氏批判へと発展していくことになる。柏木の情念を正当化してくれる唯一のものが、女三の宮の不当な処遇を憂う彼の正義感なのであり、柏木としてはそれを拠り所とするしかないのである。

しかし、柏木の主張には現実の秩序から考えて、大きな問題点を見付けることができる。それは、女三の宮が既に光源氏の正室であり、柏木が口出する権限はどこにもないという点である。野村精一氏は、この問題について、

源氏が女三の宮をいかに処遇するか、あるいは如何に愛するかの問題は当然源氏のそれなのであって、柏木の関知すべき事ではない。^(四)と述べている。また、

源氏が宮を愛さなければならぬ、という論理は、柏木自身の感情から生まれたものである。むしろ現実を見るならば、「蜻蛉日記」を引くまでもなく、一夫多妻制そのものの理念が、柏木の論理を拒否して^(五)いよう。

とも述べ、柏木の主張に対して、社会性が全く欠如していることを指摘している。つまり、ここで語られた柏木の発言は、彼の情念が常軌を逸していることを立証するものであり、危険人物として柏木を浮かび上がらせていく機能を果たしている。

こうして、蹴鞠の日の垣間見を境に、柏木には重い存在感が与えられ、彼独自の特異な人間像が白日の下にさらされることになる。そして、女三の宮との密通を暗に予想させられる様々な要素を物語の世界に提起した。作者はその意図に基づいて、柏木の人生を巧みに仕立て上げていく。その点において、蹴鞠の場面は必要不可欠であったと考えられる。

一一 密通

前章で述べた通り、柏木は彼独自の個性を見せはじめた。そして、彼の人間像の変遷はいくつかの段階が認められ、それは、女三の宮との密通事件を演じるための過程であったと私は考えるのである。

まず第一段階として、柏木には女三の宮の婿選びの際に表面化した政治的な目的の強い、野心家としての一面が付加される。この一面は、「皇女たちならずは得じ」〔若菜上〕という柏木の強い意志に象徴されるが、女三の宮の六条院降嫁と共に埋没していく。しかし、この一面はやがて訪れる密通事件の基盤となるものであつた。

続いて、「若菜上」巻の巻末近くになって、女三の宮への異常な執心を持ち合わす人物へと姿を変え、ついには、女三の宮を垣間見ることで情念の虜と化し、現実世界から離脱していくのである。

段階的に、密通事件を引き起こし得る人物へと変貌を遂げたのであるが、彼の人間像は女三の宮との密通によって、また新たなものへと変化していくことになる。

果たして、「若菜上」巻において組み立てられた柏木の情念が、密通という事象を経て目指したものは何だったのであろうか。密通事件における柏木の心的変化を辿ることにする。

(一) 柏木の恋

柏木は女三の宮を垣間見た日より、募る慕情を抑えることもできず、小侍従を介して手紙を送るが、まともに取り上げられるはずもない。柏木の手紙には、小侍従の手による返書が届けられた。

いまさらに色にな出でそ山桜
およばぬ枝に心かけきと
かひなきことを (若菜上)

小侍従は、一人気を吐く柏木にその恋の無意味さを「かひなきことを」と窘めている。こうした手紙のやり取りからは、柏木の恋の空虚な実体が予感される。一方的に注がれる柏木の情熱が、幼さが全人格であると言うべき女三の宮の心に何らかの感情を芽生えさせる形跡は認められなかった。

さらに、自らの情念に任せて女三の宮に思いを寄せる柏木には、その恋を成就させる現実的な方策は何一つない。光源氏が出家でもすればという期待以外には、彼の恋を現実化していく計算が立たないのである。

しかし、この小侍従からの返書を見たことで、柏木の恋はその空虚さを無視するように新たな段階へ入っていく。

ことわりとは思へども、うれたくも言へるかな、いでや、なぞ、かくことなることなきあへしらひばかりを慰めにてはいかが過ぐさむ、かかる人づてならで、一言をものたまひ聞こゆる世ありなんや、と思ふにつけて、おほかたにては惜しくめでたしと思ひきこゆる院の御ため、なまゆがむ心や添ひにたらむ。

(若菜下)

小侍従による拒絶を「ことわり」とは思うものの、もはややそうした分別に捕われる柏木ではない。「いでや、なぞ、かくことなることなきあへしらひばかりを慰めにては」と自らを奮い立たせ、女三の宮と直に言葉を交わす折を模索しはじめの姿が描き出される。また、「いでや、なぞ」の語勢は、蹴鞠の日、夕霧と同車しての帰途、「いで、あなかま、たまへ」〔若菜上〕と女三の宮の不遇を力説した

際に見られた、自らの感情を込める言葉遣いと同趣のものである。

どうやら柏木は女三の宮を思う時、自己の感情が溢れ出てしまうようだ。そして、このような熱情のあまり、柏木の心には光源氏への邪心も呼び起こされるのである。

続く三月末日の六条院の競射の日でも、柏木の異常さは目を引くこととなり、「わづらはしきこと出で来べき世にやあらん」(若菜下)と夕霧に柏木と女三の宮の密通を想像させるに至るのだ。夕霧は、柏木の女三の宮思慕の一端を知る身ではあるが、ここではっきりとその恋が憂慮すべき状態であることを認識するのである。こうした夕霧の見解を受ける形で、柏木の思いも語られる。

みづからも、大殿を見たてまつるに気恐ろしくまばゆく、かかる心はあるべきものか、なのめならんにてだに、けしからず人に点つかるべきふるまひはせじと思ふものを、ましておほけなきこと、と思ひわびては、(若菜下)

柏木の心に、女三の宮への熱情と不可分の関係にある、光源氏への畏怖が顕在化してることがわかる。これは、先程取り上げた、「院の御ため、なまゆがむ心」(同)と相對する心と言えよう。

一方には光源氏への邪心を潜ませ、もう一方では絶対者である光源氏への畏怖が横たわっている柏木の心内では、両者が激しく争っている。柏木は、その間に立たされ苦しいのである。そこで、当座の慰めに、あの垣間見の機縁となった唐猫を手に入れ、その唐猫をひたすら溺愛するのであった。柏木の狂熱は凄まじく、年配の女房などは、「あやしくにはかなる猫のときめくかな。かやうなるもの

見入れたまはぬ御心に」(同)と彼の奇怪な行動を不審に思うのである。唐猫を愛撫する柏木はまさに異常であり、そして、孤独であった。野村精一氏は、柏木が唐猫を手に入れるこのエピソードを、「かれの深まり行く内部と外界との葛藤の表現」と評しているが、まさに柏木に内在する異常さは社会に受け入れられるものではなく、その点で彼の孤独は深まりゆく仕組みをもっているのである。

(二) 六条院世界の変質

柏木が女三の宮に迫り、思いを遂げるに至ったのは、彼が女三の宮を垣間見してから六年もの月日が経過した後のことであつた。

作者はなぜ、この六年にも及ぶ隔たりを用意したのであろうか。柏木、女三の宮における密通事件の意義を問う時、作者が意図的に設けた六年間の意味を考慮することも必要だと思われる。よって、ここでは、この六年間に注目し、その月日の経過の中で行われた冷泉帝讓位の代替りにあたり、物語世界が受けた環境の変化について考えたい。

この代替りがもたらした六条院の変化として、紫の上と女三の宮の力関係の変化を見逃すことはできない。紫の上が寂寥を募らせ出家を志すのに対して、女三の宮はというと、朱雀院はもちろん、今上帝の強力な後見を受ける皇女として、その格を上げていくのだ。

私は、密通事件に至るまでに、作者が長期にわたる時間的隔たりを置いた要因として、六条院における女三の宮の立場を強化する意

図があつたのではないかと考えるのである。

内裏の帝さへ、御心寄せことに聞こえたまへば、おろかに聞か
れたてまつらんもいとほしくて、渡りたまふこと、やうやう等
しきやうになりゆく、(若菜下)

朱雀院や今上帝への気兼ねからでもあるが、光源氏が女三の宮の
もとに通う度合が、紫の上と「やうやう等しきやうに」なってい
たことが紛れもない事実として描かれている。

また、不自然とも思える、この六年という年月の意義について、
今井源衛氏の次のような発言がある。

これだけの年月をかけて旧世代を老境に追い込まないことには、
話全体が不調和になると作者が考えたからではあるまいか。^(註5)

確かに、女三の宮を垣間見たことで興奮覚めやらぬ柏木を意気消
沈させる、「にほひやかにきよらなる」(若菜上)姿の光源氏を老境
に追い込むには、まとまつた年月の経過が必要とされるであらう。

この六年の月日は、光源氏を代表とする旧世代を後退させ、夕霧や
柏木らの若い世代の台頭を呼ぶためのものであつたと考えられるの
である。この意味においても、女三の宮の立場の強化が裏付けられ
る。内面を覗けば、幼さを拭いきれない女三の宮の特性からすると、
年月を重ねることで、例えそれが外見だけのことであつたとしても、
女性として成熟することは密通に真実味を加える上で必要なことと
あるだろう。女三の宮が年齢的な成長を遂げることは、作者にとつ
ては重要な作業であつたに違いない。

この六年間の物語世界における変化を検証することで、密通事件

へと及んでいく複合的要素が明らかになってきた。ここにおいて、
この六年間の意義を積極的に評価したい。

また、こうして、六条院の変転を見つめる時、六条院世界の動き
と柏木の動きの間に必然的な関係があることに気付く。この関連性
についても少し触れておきたい。

女三の宮を迎えた後の六条院世界の変転の中に、柏木の動静を組
み込んで辿ってみると、彼が登場し、その存在がクローズアップさ
れる時はいつも、光源氏の目が女三の宮から遠のいた時と決まっ
ているのである。柏木が一躍その存在をアピールした蹴鞠の催しの頃
は、女三の宮は完全に紫の上の威光に圧倒され、光源氏の愛情が薄
いのは明らかな状態であつた。逆に、今上帝の即位に乗じて女三の
宮の勢いが強まり、光源氏が女三の宮に傾倒している時期において
は、柏木は全く物語に姿を現すことはないのである。そして、次に
柏木が登場するのは、光源氏の意識が重病の紫の上へと注がれ、六
条院が火の消えたような状態にある時なのだ。

このように、柏木が物語の中で脚光を浴びるのは、決まって女三
の宮側に光源氏の目が行き届いていない時であることがわかる。^(註6)
六条院という世界の中で、特に紫の上と比較して、女三の宮が優勢
である時には、柏木は必要とされない存在であるようだ。つまり、
女三の宮側に光源氏の心が十分に傾けられている時、柏木の六条院
世界への干渉は許されないのである。

柏木の登場の仕方は、彼が光源氏と正面から向き合つて対抗でき
る人物ではないことを示すものであり、作者から十分な力を与えら

れることもなく、光源氏という絶対者の領域に、密通を犯すことで侵入していくことになる柏木の運命は、過酷なものになることが予想される。だが、そんな柏木の存在が、磐石と言うべき秩序に守られてきた六条院世界に精神的変容をもたらすのである。

(三) 密通事件（柏木を基軸として）

紫の上が発病し、静養のため二条院に移転すると、六条院の人々も光源氏に続いて二条院へと移り、六条院は「火を消ちたる」(若菜下) ような寂しさであった。このような状況下に、「まことや、衛門督は中納言になりにきかし」(同) と歴とした中納言になり、帝のおぼえもめでたく、今をときめく人物として柏木の名が呼び出されることになる。

柏木は自らの声望が高まるにつれ、婿選びで退けられた無念を思わずにはいられない。柏木の落選の理由はただ一つ、位が低いという点につきた。しかし、今は中納言である。今であったならば、と思うにつけても嘆かずにはいられない。

物語は、女三の宮を忘れられない柏木が、せめてもと、その姉に当たる女二の宮を妻に迎えていたことを明らかにする。けれども、女二の宮は、柏木の女三の宮に対する熱情を鎮めるに足る存在ではなかったのだ。同じ皇女であっても、朱雀院の顧み薄い、劣り腹の女二の宮では、柏木が満足するはずがないのである。こうした柏木の姿は、依然として強い政治的野心の持ち主であることを印象付け

させる。柏木の異常なまでの恋情は、この野心を基盤とするものであり、いわば、彼の野心が変形し、ごく自然に行き着いた先なのである。そこに、女三の宮の実像は必要とされない。彼女を装飾している立派な肩書きがあれば、それで十分なのである。女三の宮の虚像へ向けての恋慕は、女二の宮を得たことで、ますます強固なものとなり、六条院が人少なである今、柏木の恋情はこの期を逃すことなく、噴出しようとしているのであった。

光源氏が紫の上に付ききりであるため、女三の宮周辺の警戒は手薄になっている。柏木はこの時とばかりに言葉尽くして、小侍従に女三の宮への手引きを頼み込むのであった。けれども、柏木の話には衆目に認められるほどの説得力がない。なぜなら、柏木の自分本位な考え方に由来するものであるからだ。軽率な女性として知られる小侍従でさえ、容易に説得することができないのである。

長い討論の果て、反発する小侍従を言いふせたのは、柏木の次のような言葉であった。

「まことは、さばかり世になき御ありさまを見てまつり馴れたまへる御心に、数にもあらずあやしきなれ姿を、うちとけて御覧ぜられむとは、さらに思ひかけぬことなり。ただ、一言、物越しにて聞こえ知らずばかりは、何ばかりの御身のやつれにかはあらん。神仏にも思ふこと申すは、罪あるわざかは」といみじき誓言をしつつのたまへば、(若菜下)

柏木の命に懸けてもという情熱の前に、小侍従も拒みきることができなくなり、思慮に欠ける彼女は手引きを約束する。とはいえ、

依然として柏木の論理は、理に叶うところが全く欠如していた。だが、この時、柏木が言った「いみじき誓言」は、この段階において、彼の本心であつただろう。柏木にとって、六条院の正室であり、二品に叙されている女三の宮との密通などは、およそ考えにも及ばないことであつたはずである。では、柏木を密通へ導いたものは何だったのであるうか。

柏木の意図せざる密通は、加茂の御禊を明日に控え、女三の宮周辺が人少なな折に、小侍従の手引きにより現実のものとなつた。この場においても、柏木は小侍従に手引きを約束させた時と同様、実に饒舌である。

柏木は女三の宮に、自分としては女三の宮から厭われる身とも思われないこと、朱雀院も自分と女三の宮の結婚をまるで問題にならぬとは思つていなかったこと、そして、これ以上大それた罪を犯そうとする気持ちはないことなどを言い募るのであつた。しかし、自らの長期にわたり抱いてきた切実かつ複雑な心情を嘆訴する長口上は、全くその意図を解されようとはしない。女三の宮の内実はあまりに幼く、乏しい感情で支配されているのである。彼女に返答などできるはずがない。ただ一途に恐怖を感じるのみなのである。このような女三の宮を相手に、柏木の訴えは彼の一人芝居であるかのやうに悲痛にも続けられる。「あはれとだにのたまはせば、それをうけたまはりてまかでなむ」(同)と最低限の要求を繰り返す柏木の姿は、あまりにも切ない。

こうして、柏木が出会つた女三の宮は、その心中に仕立て上げた

予想をすっかり裏切るもので、皇女として威厳に満ち溢れた高貴びととは似ても似つかぬ姿であつたのだ。

いとさばかり気高う恥づかしげにはあらで、なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの、あてにいみじく思ゆることぞ、人に似させたまはざりける。さかしく思ひしづむる心も失せて、いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えてやみなばやとまで思ひ乱れぬ。(同)

しかし、高貴びとらしからぬ女三の宮の姿を目の当たりにしても、柏木は光源氏や夕霧が女三の宮に抱いたやうな輕侮の念を感じない。逆に、氣後れする部分がないため、自分の情熱を抑制することができなくなるのである。想像とは異なる女三の宮の姿ではあつたが、それがかえつて、柏木から最後の理性を奪い去ってしまうことになつたのだ。柏木を密通という行為に導いたのは、女三の宮の幼さにほかならないのである。

柏木は女三の宮を我がものとすることはできたのだが、彼の愛に對する共感の言葉を得ることはできない。女三の宮は、子どものやうに泣くばかりなのである。女三の宮のこうした空虚な反応は、「はてはては、むくつてくこそなりはべりぬれ。またかかるやうはあらじ」(同)と柏木を苛立たせる。彼らの間では、愛が満たされるかどうかという以前に、人間としてのコミュニケーションすら成立しないのであつた。

さらば不用なめり。身をいたづらにやはなしはてぬ。いと棄て

がたきによりてこそ、かくまでもはべれ、今宵に限りはべりなむいみじくなむ。つゆにても御心ゆるしたまふさまならば、それにかへつるにても棄てはべりなまし（同）

これは、柏木の絶望と身の破滅を自覚した言葉である。私は、柏木が死を口走ることから、第二部の彼を象徴するとも言える情熱の転換点が、ここにあると考えるのだ。外見のみが立派で空虚な内面を持つ女三の宮の存在が、柏木を死へと導いていくのである。

こうした密通における柏木の精神の推移を野村精一氏は、「彼の野心は、情熱は、その達成によって、逆に彼自身の生の不安に変わるである」とまとめている。

また、柏木の恋は、実現への見通しが甚だしく欠如したものであったが、それは様々な条件が偶発的に、しかもきちんとそれぞれの役割を果たして、現実化するものであったのだ。そして、その達成と共に跡形もなく消え去ってしまう仕組みを有していたのである。

身の破滅を思いつつも、女三の宮との「あはれ」の共感をひたすら望む柏木について、石田穰二氏は、次のように指摘している。

作者は、運命に導かれたひとつの情熱の極點を描いてあるやうに見える。運命の道をそれる事は出来ないであらう。

この後、密通は発覚し、柏木は悲劇的な死を享受することになる。作者は、いかにもそれしかあり得ないという形をとって、運命に導かれていく彼を描いていく。まさに、この密通が、柏木の前途にそうした運命のルールを敷くことになったのである。

三二 露頭

柏木と女三の宮の密通事件は、あまりにも呆気なく光源氏の知るところとなった。ここから物語は光源氏をも巻き込んで、それぞれの心の内に異なる苦悩を抱かせていくことになる。

物語は密通事件が発覚したことで、深い懊悩を強いられる当事者たちの心理を、より人間味溢れる表現で描き出していく。苦悩する様子を通じて、各人の個性をはっきりと焙り出し、悲劇的とも言うべきそれぞれの運命に導いていくのである。

よって、本章では、個々の苦悩が何に由来し、彼らにどのように影響していくのかという点に注目していきたい。また、彼らの内面を凝視することで、華麗に装われた六条院の実態が照射され、その根底に潜んでいた矛盾を浮かび上がらせることができると考えている。

当初から作者が意図していたと思われる、密通、露頭と進む展開に、柏木の個性的な人間像がどう作用するのか、光源氏の心理にも着目しつつ、検証していきたい。

（一） 苦悩する光源氏

ここでは、柏木と女三の宮の密通を確認することになった光源氏の精神的葛藤を辿り、彼の苦悩の本質に迫りたい。

光源氏は紫の上の病の小康を得て、朱雀院への義理立てと、彼の心に僅かばかり存在する女三の宮への愛情から、長らく足が遠のいていた六条院へ向かったのだ。

女三の宮に引き止められた光源氏は、本来紫の上のもとへ帰る予定を変更し、宮のもとに泊まることにした。そして、その翌朝、問題となる柏木の手紙を発見するのである。こうして、光源氏はいよいよ、密通事件に巻き込まれることになるのだった。

では、密通という事実を前に、光源氏の心がどういった経路を辿り、どのような精神的帰着を迎えるのかを考察していくことにする。あなはいけな、かかる物を散らしたまひて、我ならぬ人も見つけたらましかば、と思すも、心劣りして、さればよ、いとむげに心にくきところなき御ありさまをうしろめたしとは見るかし、と思す。(若菜下)

これが、柏木からの手紙を見付けた光源氏の最初の感想であった。光源氏はこのような重大な内容の手紙を放っておく、女三の宮の始末の悪さに呆れ返るのである。女三の宮の「むげに心にくきところなき御ありさま」に怒りと驚きを隠せない光源氏であるが、さらに、彼を驚愕させたことは、柏木の思慮のない手紙の書きぶりであった。

いとかくさやかには書くべしや、あたら、人の、文をこそ思ひやりなく書きけれ、落ち散ることもこそと思ひしかば、昔、かやうにこまかなるべきをりふしにも、言そぎつつこそ書き紛らはししか、人の深き用意は難きわざなりけり、(同)

柏木の文面には、「年を経て思ひわたりけることの、たまさかに

本意かひて(同)などと、密通の事実がはっきりと書かれている。光源氏は若い頃、自分が艶書を書いた時の経験を思い起こし、柏木の不注意な書きぶりに驚くのであった。光源氏の怒りは、密通の事実と共に、この若い二人の思慮に欠けた行為にも向けられているのだ。

また、光源氏にとって女三の宮は、自分の内面においての情熱ではずっと勝っている紫の上より、六条院の正室として丁重に扱ってきた妻である。それなのに、柏木と通じていたのだ。光源氏の怒りは、その分大きい。光源氏は、柏木に対して明確な優越感を持っていた。故に、女三の宮が柏木程度の男と通じたことが不可解でならない。光源氏は許しがたい不相応さを感じ、腹立たしく思わずにはいられないのである。

しかし、光源氏は准太上天皇として、この過失を人々に知られないように取り繕わなければならない。込み上げてくる怒りと、それを押し殺そうとする相反する二つの思いが、光源氏の中で葛藤する。光源氏のこうした葛藤は、やがて自らの心の奥底に沈めたはずの過去の罪を甦らせ、新たな苦悩を呼び起こしてくるのである。

故院の上も、かく、御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ、思へば、その世のことこそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ、と近く例を思すにぞ、恋の山路はえもどくまじき御心まじりける。(同)

憎悪と絶望感に打ちのめされる光源氏の心が、かつて自分が引き起こした藤壺との密通を想起することで、故桐壺院の内意を察する

心境へと転じていく推移が描かれている。父桐壺院もすべてを知っているが、「知らず顔」を通していたのかと思うと、何ともいたたまれないのである。そして、彼の心は、理性では抑えきれない恋の情動を非難することはできないという最終結論に辿りつくことになる。

ここで光源氏が、藤壺との不義密通を思い起こすことによって生じる彼の心的変化について、秋山虔氏は次のように解釈している。

柏木を否定すること即わが存在の否定以外ではありえないからではないか。源氏はわが存在の根基の秘められた暗部の恐るべき明確な投影として柏木を見るに至った。^(注15)

単に、自分の過去における罪を思い、同じ罪過を犯した柏木を裁くことができないというだけでなく、光源氏のこの上ない栄華がその裏側に隠し持っていた危険性を考えさせる存在として、柏木を見ている点が興味深い。

藤壺との密通は誰にも知られることなく、光源氏に栄華をもたらす礎となった。光源氏の昇位や冷泉帝への結び付きは、全て藤壺との密通にその支点を持つものである。自分は密通の結果として、准太上天皇にまで昇り詰めたのだ。ここに至って、光源氏は自らが歩んできた栄華の道には、常に危険が付き物であったことを自覚することになる。「思へば、その世のことこそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ」と思う光源氏にとって、今の柏木は、自分の危うさを象徴する存在になったのである。

今回の密通事件が発覚したことで、光源氏と柏木は結び付けられ

ていく。これで、物語における柏木の役割がはっきりしたと言える。柏木はもう一人の光源氏となることを定められ、そのために個人的な人間像が付加され、第二部の物語に鮮烈に登場したのである。

(二) 柏木の畏怖

柏木は命を懸けて、女三の宮から言葉による愛の証を得ようとするが、彼の愛を受け入れる返事を聞くことはできない。僅かに後朝の歌が交わされるが、それも柏木がようやく帰ってくることにほっとした女二の宮が、辛うじて歌の贈答に応じただけのことなのだ。

柏木の一方的な恋は、現実化すると共に悲劇へと転じていくことを余儀なくされる。では、その過程を辿っていくことにする。

正室である女二の宮のもとには帰らず、父の邸にそとと帰りついた柏木であるが、長年の恋が実った喜びなどは、すっかり失せてしまっている。柏木は自分の犯した罪の重さを感じ、激しい後悔と自責の念にとらわれているのである。こうして、柏木の内部に理性が回復してくると、彼は罪の意識と共に、光源氏に対する畏怖の念に責められていくことになる。

帝の御妻をもとり過ちて、事の聞こえあらむにかばかりおぼえむことゆゑは、身のいたづらにならむ苦しくおぼゆまじ。しかいちじるき罪には当たらずとも、この院に目を側められたてまつらむことは、いと恐ろしく恥づかしくおぼゆ。(若菜下)

「帝の御妻」を犯し、表沙汰となることよりは、「しかいぢるき罪」でないことを柏木自身もよく承知しているが、死罪になるより、光源氏に疎んじられることが恐ろしいのである。元来、柏木は光源氏に対して、強い劣等感を持つてゐる。それは、家系から見て、光源氏に敗北し続けた歴史によって蓄積された感情である。故に、柏木の内にある光源氏の絶対性は強固なものなのだ。その光源氏に睨まれて生き続けることは何より怖い、と柏木は考えてゐるのである。

柏木の罪の意識はその心中に、六条院の秩序に逆らつた自分を糾弾する光源氏の鋭い眼差しを、いとも簡単に設定してしまふ。だが、この眼差しは、柏木の心内にのみ存在を認められた幻影にすぎない。自分勝手に女三の宮の虚像を作り上げ、ひたすら思慕し続けた時と同様に、今回の光源氏に対する畏怖も、柏木がその心内に自ら作り上げた、自分を非難する光源氏の虚像によつてもたらされたものである。よつて、柏木の光源氏に対する畏怖には何の謂れもなく、女三の宮に対する恋がさうであつたように、彼の精神の世界にのみ成立する観念でしかないのだ。

柏木の光源氏に対する畏怖が決定的なものになるのは、女三の宮にあてた手紙が光源氏に見えられたことを知つた時からである。

いつのほどにさること出で来けむ、かかることは、あり経れば、おのづからけしきにても漏り出づるやうもやと思ひしだにいとつつましく、空に目つきたるやうにおぼえしを、まして、さばかり違ふべくもあらざりしことどもを見たまひてけむ、恥づか

しく、かたじけなく、かたはらいたきに、朝夕涼みもなきころなれど、身も凍むる心地して、言はむ方なくおぼゆ。(同)

柏木は密通の露頭を恐れるあまりに、「空に目つきたるやう」な畏怖を光源氏に感じてきた。そして、今、手紙が発見され誤魔化しようもない文面を光源氏に読まれたと知つた柏木は、朝夕涼しくもない時候であるにも拘らず、「身も凍むる心地」がするのである。もはや柏木は、光源氏に対する畏怖で支配され、光源氏との間は疎遠にならざるを得ない。これまでの光源氏から受けた厚情を思い返すと、自分が光源氏の憎悪の対象となることが底知れず恐ろしく耐えられることではないのである。光源氏への畏怖の念は、光源氏の恩顧を裏切つた心苦しさによるところもあるのだ。

また、柏木の恐怖感は精神的な範疇から抜け出し、肉体的な問題へと移行していくことになる。柏木が肉体的な変調を来し出すことについて、石田穰二氏は、光源氏に対する畏怖の念との関係を次のように述べてゐる。

彼の病ひは、源氏への畏怖が、いはば眞の畏怖である事の、肉體を以てする證しであつたとも言へよう。⁽¹⁴⁾

遡つて考えてみれば、あの密通の場面の折から、柏木は自分の死を意識しはじめていたと言へるのではないだろうか。柏木は死を覚悟したと訴え、命懸けで女三の宮から愛の言葉を求めたのだ。今、密通が発覚したことにより、物語は、柏木の生への不安を實際問題として提示しはじめるのである。光源氏への畏怖の念は、柏木の内面において増殖し、彼の死の原因となつていく。そして、柏木は作

者の意図するところにより、死にゆく運命を甘受していくのである。恐れや不安が募り、身体にも異常を来しはじめた柏木は、宮中にも出仕せず、現実社会から遠のき、自ら孤独感を強めていく。柏木はまさに、自滅への道を突き進んでいると言えるのである。

(三) 六条院世界の内的崩壊

密通事件発覚後の光源氏と柏木の内的変化を辿ってきたが、彼ら二人の思いは見事に食い違いを見せる。

まず、光源氏の場合を見ることにする。光源氏の怒りは大きいが、柏木、女三の宮への対応は寛大なものであった。柏木に対しては、過去のわが罪を思えば責め切ることはいかない。また、女三の宮に對しても、朱雀院や今上帝の手前、感情を表に出すことができないのである。密通の実事を知るのは自分だけなのであるから、事情を知らない朱雀院や今上帝に自分の愛情が薄いと思われることは、本意極まりないのだ。

対外的に見れば、光源氏の対応は冷静であると言えよう。光源氏の事件に対する観察とそれによる判断は適切なものであり、光源氏の思慮があつたお陰で、事件は社会的意味を持たぬまま、彼の内面で処理されていくことになるのである。だが、これだけ客観的な判断を下すことができた光源氏であるのに、彼は一つ大きな思い違いを起している。柏木が熱烈に女三の宮を思っているのと同じく、女三の宮にも柏木に対する愛情が存在していると考えていることだ。

光源氏は女三の宮の降嫁以来、彼女の幼さを嫌というほど目の当たりにしてきたはずであった。にも拘らず、ここに来て、女三の宮の柏木に対する愛情の存在を無条件に信じてしまうのである。この錯覚が、光源氏に最も大きな痛手を負わせることになるのだ。

朱雀院からの手紙の返事を女三の宮に書かせる場面があるが、その時、光源氏はこの錯誤に由来する抑えがたい憎悪を口に出している。光源氏は、「こよなくさだすぎにたるありさまも、侮らはしく目馴れてのみ見なしたまふらむも」(若菜下)と自らの老醜を言い、女三の宮が自分を見くびり、飽き飽きしているのだと恨みじみた非難の気持ちを露にするのである。つまり、この錯誤は、光源氏に老いを自覚させ、若い世代に対する嫉妬や羨望をもたらすことになるのだ。そして、この嫉妬や羨望は、若い世代、すなわち、柏木に対する敗北感へと転じていくのである。密通事件に関して、柏木と女三の宮の稚拙さに呆れる反面、二人の若者に敗れたという意識が、光源氏の内面で深刻に膨らんでいくことになる。

けれども、こうした光源氏の意識は、全く事実と反するものであるということが、柏木を評する女三の宮の心情から明らかにすることができると。

院をいみじく怖ぢきこえたまへる御心に、ありさまも人のほども等しくだにやはある、いたくよしめき、なまめきたれば、おほかたの人目にこそ、なべての人にはまさりてめでらるれ、幼くよりさるたぐひなき御ありさまにならひたまへる御心には、めざましくのみ見たまふほどに、(若菜下)

女三の宮は、光源氏と柏木にはつきりとした差異を付けている。

光源氏に比べれば、柏木などは格段劣った存在としか思うことができないのである。光源氏は、女三の宮に軽んじられてなどいないのだ。

光源氏は、柏木に敗れたと思ひ込んでしまっている。しかし、柏木の方では、光源氏が密通の事実を確認したことを知り、いよいよ光源氏に対する畏怖の念に心も体も締め付けられていくのである。この柏木が感じている畏怖の念も錯誤に満ちたものであることは、前述した通りなのだ。

こうして考えてみれば、今回の密通事件に関する人物は、お互いその内面に誤った認識を疑うこともなく信じていることで、それぞれ異なった苦悩を味わうはめになっていることがわかる。こういう人間関係の在り方を、伊藤博氏は、次のようにまとめ上げている。

第二部の、とくに密通事件後の支配的な人間関係は、各人が情意疎通を欠いて自らの孤独な想念のうちに閉じこもり、錯誤によつてのみ「他者」とつながり合う、という孤絶したものになり⁽¹⁶⁾させている。

このようにまとめられた錯誤の上に成り立つ人間関係は、登場人物それぞれの内面に行き違いを生み出し、人知れぬ苦悩を強いるのである。また、伊藤氏は、この精神的に孤立した人間関係の起源とその展開について、

早く女三宮降嫁後の理想的な紐帶源氏―紫上に端を発し、密通事件後の世界を色濃く染め上げてやがて夕霧物語をも貫通する

に至る。^(注16)

という見解を述べている。この人間関係が、精神的深化を見せる第二部の物語の特徴と言うべきものであることは明らかなのである。

こうした人間関係は、六条院世界において各自の内的意識が孤立し、分断されていることを示している。六条院世界の平和は、この人間関係が構築されることにより、多くの摩擦が引き起こされ、その内面において決定的な崩壊の様相を見せていくのである。

(四) 試楽の夜

密通が発覚してから、柏木は光源氏を恐れるあまり、六条院への不参が続いていた。最高権力者の怒りを買う立場となった柏木は、ただ、光源氏の動きに従うほかないのである。

しかし、柏木が恐れ戦く光源氏としても、受け身にならざるを得ない状態にあった。年長者としての威厳、准太上天皇としての立場を考えれば、晩年における栄華の象徴とすべく六条院の正室に迎えた女三の宮が、柏木ごとく通じていたなど公表できるはずがない。光源氏にとって、柏木に対外的な制裁を加えることは、若さに屈する老いた自分の惨めな姿を公表することに等しいのである。

ここに、お互いに自らの内面においてのみ苦悩し、対外的には何の衝突も生じない、密通発覚後の両者の関係が見て取れる。だが、こうした関係が、たった一度、脆くも崩れ落ちた時がある。それは、朱雀院の五十の賀の試楽の夜、光源氏と柏木が密通発覚後、はじめ

て対面する場において、光源氏が漏らした言葉によるものであった。光源氏は六条院をあげての試案に、音楽が堪能な柏木が来なくてはいかにも不自然であると考え、思い悩んだ末に柏木を呼び寄せることにした。柏木は重く病んでいることを理由に断りを入れるが、父の大臣の強い勧めと、光源氏から重ねて丁寧な書状が届くので、心が進まぬまま六条院へ参上するのである。

ようやく参上した柏木の姿は、「げに、いといたく痩せ瘦せに青みて」(若葉下)と光源氏の目に映る。けれども、光源氏は、柏木がいくら「痩せ」て「青みて」いても、その肉体的不調には深く留意することはなく、むしろ、柏木の「い」とどしづめてさぶらひたまふさま(同)を見て、彼の美質に意識が傾いていくのである。このことから、光源氏が、柏木の内面における苦悩の深刻さを見抜く力がないことがわかってくる。ここに、光源氏が柏木を死に追いやってしまう最大の要因が隠されているのである。

試案のはじまる前の二人の対面は、お互いの努力により、それぞれの内面に渦巻く感情を何とか爆発させることなく語らうことができた。しかし、この実に緊迫した状況の中、何とか保たれる二人の關係について、高橋亨氏は、「この危い均衡が破綻するのは、じつは何を契機としてもありえなはずである」と述べている。そして、その通り、この二人の間にはこの夜、決定的な亀裂が生じるのである。試案がはじまり、その夜の華麗な舞樂の中で、光源氏の酔いに紛れて言った一言が、その均衡を破綻させる契機となるのであった。

過ぐる齡にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。

衛門督心とどめてほほ笑まるる、いと心恥づかしや。さりとて、いましばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり(若葉下)

光源氏が発したこの言葉は、柏木にとって何より恐ろしい言葉であった。しかし、光源氏の側からすれば、柏木を脅迫する意図を持つて発した言葉というよりは、むしろ、柏木の若さに対する嫉妬心が言わせた言葉であつたと考える方が自然である。柏木が、どれほど深刻に自分を恐れているかなど気付け気配すらない光源氏にとって、この言葉は若さに対する精一杯の抵抗であり、いわば、光源氏の惨めな敗北宣言と受け取ることができるのである。けれども、既に光源氏への畏怖の虜と成り果てている柏木には、こうした言葉であっても、自らを死に追い込むに足るものであつたのだ。

柏木の苦悶は、光源氏には決して理解されない。その分、柏木の様子には悲痛なものがあつた。光源氏から無理に強いられた酒は、柏木にとって体刑を与えられたに等しい苦痛であつたはずだ。そのことは、この後すぐ語られる柏木の痛々しい様子を見れば、一目瞭然である。

心地かき乱りてたへがたければ、まだ事もはてぬにまかてたまひぬるまに、いといたくまどひて、例の、いとおどろおどろしき酔ひにもあらぬを、いかなればかかるならむ、つつましきものを思ひつるに、氣ののほりぬるにや、いとさいふばかり、臆すべき心弱さとはおほえぬを、言ふかひなくもありけるかな、とみづから思ひ知る。しばしの酔ひのまどひにもあらざりけ

り。やがて、といったくわづらひたまふ。(同)

柏木は断罪された訳ではない。しかし、ここに、光源氏の敗者の意識にとらわれた心内の吐露とも言える皮肉を得ることで、柏木は即、肉体的な苦痛を発することになる。「心地かき乱りてたへがたければ」中座した柏木は、そのまま病の床につき、死に至るようになるのである。

試楽の夜の光源氏との対面が、柏木の運命の行き着く先を明確に指し示すことになったのだ。

四 死

「柏木」巻は、その巻名が指し示すように、柏木を中心に据えて物語が展開していく。

「柏木」巻は、柏木の長大な心内語によりその幕を開け、巻末には彼の死を悼む人々の嘆きが語られる。途中、柏木との不義の子を出産する女三の宮とその周囲の人々が描かれ、それに関連する形で光源氏が登場するが、その登場はあくまでも女三の宮の出産によるもので、光源氏が主導権を有した登場ではない。つまり、この巻においてのみ言えば、柏木が主人公として据えられ、彼の死を描くために作者が用意した一卷だと考えることができるのである。

「若菜上・下」巻を通して、柏木が死に至る過程は全て語りおさめられている。作者がこの「柏木」巻ですべきことは、柏木がどのような死を迎えるのかという点について、あらゆる角度から緻密に

描き出し、死に臨む彼の意識を情感溢れる文章で、我々読者の前に展開させるだけなのである。

柏木の死は、内面から描き出されるという点において、特徴的であると(1)言われている。作者は、柏木の心理を丁寧に拾い上げ、彼の人生を見事に描き上げたのだ。技巧を凝らして語られる柏木の心の動きは、彼の人間性を明らかにし、その短い人生の意義を照射する。こうして、克明に描かれる柏木の死の様子は、作者の彼に対する思い入れの深さによるものであろう。柏木という人物への作者のこだわりがもたらしたとも言うべき「柏木」巻を検証することで、作者が真に求めた柏木像を見出したい。

(一) 柏木の述懐

「柏木」巻の冒頭は、「衛門督の君、かくのみなやみわたりたまふことなほおこたらで、年も返りぬ」(柏木)と書き出され、試楽の夜より現実化した柏木の内なる光源氏への畏怖が、進むべき唯一の道として、彼を死に導くものであったことが明らかにされている。

この後、物語は、柏木の長大な心内語に紙面を割き、ここにおいて柏木は初めて、自己を客観的に見詰め直すことができるのである。この心内語は、これまでの柏木の精神の全貌を露にし、柏木という人物を追求する上で重要な部分であるので、長くはなるが本文より引用し、その内容を検証することにする。

大臣、北の方思し嘆くさまを見たてまつるに、強ひてかけ離れ

なむ命かひなく、罪重かるべきことを思ふ心は心として、また、^(a)あながちにこの世に離れがたく惜しみとどめまほしき身かは、^(b)いはけなかりしほどより、思ふ心にて、何ごとをも人にいま一際まさらむと、公私のことにふれて、なのめならず思ひのほりしかど、その心かなひがたかりけりと、一つ二つのふしごと、身を思ひおとしてしこなた、なべての世の中すさまじう思ひなりて、後の世の行ひに本意深くすすみにしを、親たちの御恨みを思ひて、野山にもあくがれむ道の重き絆なるべくおほえしかば、とどまかうざまに紛らはしつづ過ぐしつるを、つひに、なほ世に立ちまふべくもおほえぬもの思ひの一方ならず身に添ひにたるは、我より外に誰かはつらき、心づからもてそなひつるにこそあめれ、と思ふに、恨むべき人もなし。神仏を^(c)もかこたむ方なきは、^(d)これみなさるべきにこそはあらめ、^(e)誰も千歳の松ならぬ世は、つひにとまるべきにもあらぬを、^(f)かく人にもすこしうち偲ばれぬべきほどにて、なげのあはれをもかけたまふ人あらむをこそは、一つ思ひに燃えぬるしるしにはせめ、せめてながらへば、おのづから、あるまじき名をも立ち、我も人も安からぬ乱れ出で来るやうもあらむよりは、なめしと心おいたまふらんあたりに、さりともし思しゆるいてむかし、よろづのこと、いまはのとちめには、みな消えぬべきわざなり、また異さまの過ちしなければ、年ごろものをりふしごとにはまづはしらひたまひにし方のあはれも出で来なん、など、つれづれに思ひつづくるも、うち返しとあぢきなし。(柏木)

もはや避けがたい死を、柏木が内面において受け入れる過程が示されている。

この世にどうしても生きとどまっていたいわが身である、うか(傍線部(a))、という問題提起をし、それに応える形で、死を目前にした自分の生涯を振り返っていることがわかる。

(b)で「いはけなかりしほどより」とあるように、柏木の回想は幼少期へと遡るのである。そして、「若菜上」巻で初めて見せた野心家としての一面が、幼い頃から持ち続けていたものであったことを明らかにするのだ。「公私のことにふれて、なのめならず思ひのほりしかど」と野心家としての自分をさらに強調し、(c)において、そうした野心が打ち砕かれ、自信を喪失していったことが語られる。

こうした自信の喪失で、「なべての世の中」がおもしろくなくなり、「後の世の行ひに本意深くすすみにしを」と出家の意志があったことが、初めて明らかにされるのである。しかし、自分の出家を悲しむだろう両親の姿は、「重き絆」になるに違いない。そう思い、柏木は出家を成し遂げられなかったのだと言っているのである。

このように、自身の「この世」との関わりを過去から振り返ることで、不安定ながらも何とか生き続けてきた柏木の生の在り方が浮かび上がってくる。だが、この直後、柏木が「この世」にどうしてもとまることができなくなった事情が語られはじめる。

(d)で語られる「世に立ちまふべくもおほえぬもの思ひ」は、女三の宮との密通がもたらした苦悩のことである。女三の宮への思慕、密通による罪の意識、そして、事実を知る光源氏への畏怖。これら

の感情が、柏木を社会から隔絶し、彼の意識を死へと傾斜させていくのである。ここから、自らに死を積極的に引き入れ、それを自身に納得させる柏木の心理が現れてくる。

(e)において、「誰も千歳の松ならぬ世」であるのだから、いつまでも生きとどまつていられるものではないのだと命の定めを思い、死という道を選ぶことについて、肯定的にとらえようとする柏木の心理が窺える。

そして、柏木が死を彼の内面で正当化させる理由として、続く(f)と(g)を挙げている。(f)では、今、死ぬことで、女三の宮がかりそめの憐憫をかけてくれるだろうということを思い、(g)では、このまま長らえれば、世間に密通が露顕し、悪評を買うことを予想して、生きることの危険性を考えているのである。つまり、柏木は、女三の宮との過失を清算する手段として死を考えているのだ。自分の死が光源氏に同情され、哀惜の念を買い、さらには、自分の過失が帳消しになるだろうということをはっきりと予想して、死を自らに招き入れようとしているのである。この長大な心内語を高橋亨氏は、「死を志向する論理の考証過程」と呼んでいる。まさに、この心内語を端的に評した言葉である。柏木が自分の置かれている現実を直視し、最良の方策を模索していく過程で導き出されたのが「死」であるのだ。

こうして、柏木の心内語の内容を見てきた訳であるが、そこには、作者の柏木に対する傾倒が窺えるように感じるのである。柏木が、論理的に事態の収束を考えれば、必然的に死という道に辿り着く。

そのことを描くためだけならば、柏木の生涯を振返ったり、出家の意志があつたなどという新事実を付加する必要はないはずなのだ。

ここにおいて、私は、作者の柏木に対する関心が、飛躍的な膨らみを持ったものである。作者が初めて、六条院の物語という規定を取り払い、柏木の視座に立つたと言えるのではないだろうか。

では、作者の柏木に対する思い入れを検証すべく、柏木の心内語の要点と思われることと、その関連性について考察していくことにする。

(b)で言われる幼少からの志の高さは、女三の宮の婿選びの際に語られた、

高き心ざし深くて、やもめにて過ぐしつ、いたくしづまり思ひあがれる気色人には抜けて、才などもこともなく、つひには世のかためとなるべき人なれば……(若菜上)

という柏木の姿と連続するものがある。このような野心的な一面を、彼に生来備わった性質として強調することで、(c)における挫折が、より悲痛なものに演出される。これによって、柏木の人生の重苦しさが表現され、出家を望む心にも繋がっていくのである。こういった(b)と(c)による回想は、(d)において、柏木が死を志向する心理を裏付けるために用意されたと考えられるが、ただ、繋ぎとしての役割だけではなく、柏木像に厚みを持たせる肉付け作業であるとも言えるのだ。そして、その作業は、柏木の孤独な一面を際立たせていくのである。

柏木の心内語が明らかにした彼の生は、苦悩や孤独で形作られ、

悲劇性を帯びたものであった。「死を志向する論理の考証過程」であると言われるように、この心内語により浮かび上がった柏木の生の全体構造は、自らの意志として死を選ぶために作られたようなものだが、作者はここに、彼の個性と言うべき野心が生んだ悲劇性を付け加えたのである。そして、柏木の悲劇性を多くの引き歌を使って、表現豊かに描いていく。

この心内語の中で黒丸印を付けた部分が、歌を引いているところである。玉上琢彌氏は、引き歌を使うのは宮廷女流風であるとし、作者が「読者たる宮廷女流むきに、こうしたてたのだろう」と述べている。引き歌の多様は、作者が柏木の内面的な孤独や悲哀を、我々読者にも余すところなく享受して欲しいと望んだためになされたことではないだろうか。ここに、作者が柏木という人物に没入し、感情移入していることが窺えるのである。

こうして、この詳細で明晰な自己分析の中に、柏木の持つ悲しみが歌い上げられていく。この心内語で、柏木という人物の独自性が示され、その存在が肥大化していくことになるのである。

(二) 死に向かう柏木

柏木は、今、自分に残された道は、死を選ぶ以外にないと一途に思うのであるが、女三の宮への思いは断ちがたい。死という運命を受け入れる柏木の意識は、女三の宮への切ない思慕に向けられていく。

柏木は、小侍従を介し、女三の宮へ最後の手紙を送るのである。そして、女三の宮に次のような歌を詠む。

いまはとて燃えむ煙もむすほはれ

絶えぬ思ひのなほや残らむ（柏木）

女三の宮への思いは、自分の死後もこの世に残るだろうと断ち切れぬ執心の深さを詠んだのである。

そして、女二の宮に「あはれとだにのたまはせよ」(同)と訴え、「あはれ」の言を得たいと考えているのだ。女三の宮から「あはれ」の一言を受け取り、死後の闇の道を照らす光にしようと言うのである。柏木は死を目前にしても、女三の宮への執着が消えない嘆きを逆手に取っているのだ。当時は愛憐の情を断つことが、すなわち、仏の救済を得る道だとするのが一般的な考え方であった。だが、ここで見られる柏木の思念の在り方は、当時の考え方とは逆であり、こうしたところに、柏木という人物の特異な個性が窺え、そこに独創性があると言えよう。

「あはれとだにのたまはせよ」という訴えは、柏木が女三の宮に求め続けてきた言葉であった。幼いばかりの女三の宮は、今に至るまで、柏木に「あはれ」の一言を与えずにいる。柏木は、何としてわが生の証として、「あはれ」の言葉を得たいのである。

また、柏木は小侍従を呼び寄せ、光源氏への畏怖故に、破滅していく自分の命の有り様を切々と語るのであった。

深き過ちもなきに、見あはせたまつりし夕のほどより、やがてかき乱り、まどひそめにし魂の、身にも還らずなりにしを、

かの院の内にあくがれ歩かば、結びとどめたまへよ(同)

柏木の話は、女三の宮への未練にも転じている。彼の内面に存在する、光源氏への畏怖と女三の宮への執着が、死を前にする柏木を支配しているのであった。

柏木は死を選ぶことで、すべては清算されたと考え、死によって訪れるであろう心の平穩を希求しているのである。しかし、その死をもつてしても整理することのできない女三の宮への未練に、柏木は固執しているのだ。

こうした柏木の固執は、彼の思いに背を向ける女三の宮の返歌をも、「あはれ」の共感と受け止めるに至るのである。柏木の訴えに對する女三の宮の返歌は、次のようなものであった。

立ちそひて消えやしなましうきことを

思ひみだるる煙くらべに(同)

柏木の理不尽な恋により、自分もまた、苦しい立場に立たされた女三の宮の恨みが読み取れる。「煙くらべ」は、そんな気持ちを象徴していると言えよう。女三の宮の側からすれば、柏木に対する憎悪や恨みの思いを込めたものであるのだが、死期が近付き、女三の宮から「あはれ」の一言を得ることに固執する柏木には、女三の宮の真意は伝わらない。「あはれとだにのたまはせよ」という柏木の訴えに応じたものでないことは明らかであるが、柏木は一方的に「あはれ」の共感がなされたと解釈するのである。

柏木は、「いでや、この煙ばかりこそはこの世の思ひ出ならめ。はかなくもありけるかな(同)」と涙に暮れる。女三の宮から「あは

れ」の一言を得たと思わずにはいられない柏木は、「この煙ばかりこそはこの世の思ひ出ならめ」と考え、女三の宮からの「煙くらべ」を自らの生の証にするのである。ここに至って、柏木は決定的に、死を急ぐ人間と成り果てたのであった。

死に向かって歩を進める柏木は、女三の宮の出家の知らせを聞き、さらに衰弱していく。一条邸の正室、女二の宮との対面も叶わず、重態に陥った柏木は、死を前にして、見舞いに訪れた夕霧に後事を託す。ここで、柏木はこの世の別れに際して、心残りに思うこと、そして、自分の死後に望むことを語り出す。つまり、柏木の遺言なのである。

柏木はまず、親に先立つ不孝、信任が厚かったにも拘らず、帝に十分仕えることができなかったこと、人生を振り返ってみて、思い通りにいかなかった恨みなど、心残りに思うことを列挙していく。

ここまでは、いかにも権門の長子らしい発想であるが、この後、柏木の告白はいよいよ、核心部へと移っていくのである。

心の中に思ひたまへ乱るることのはべるを、かかるいまはのきざみにて、何かは漏らすべきと思ひはべれど、なほ忍びがたきことを誰にかは愁へはべらむ。(同)

臨終の前に、柏木にはどうしても言わずにはいられないことがあるのだ。打ち明ける相手は、他の誰でもなく、夕霧でなければならぬ。そして、「六条院にいささかなる事の違ひ目ありて(同)」と密通事件による苦悩を、それとわからぬよう漠然とした言い方で語りはじめ、死に至る病の全貌を明らかにするのである。

柏木は、試案の日、光源氏と対面した際のことを語り出し、その時、光源氏に痛烈な皮肉を浴びせられたことで、

いとど世にながらへむことも憚り多うおぼえなりはべりて、あぢきなう思ひたまへしに心の騒ぎそめて、かく静まらずなりぬるになむ。(同)

と病の床についた過程を説明した。柏木にとって、光源氏の皮肉が致命的なものであったことが改めて理解されるのだ。柏木は、光源氏の威光に圧倒され尽していることになる。そして、光源氏に対する恐れは、世に生き長らえることに對する引け目へと広がっていくのである。

いはけなうはべし時より、深く頼み申す心のはべりしを、いかなる纒言などのありけるにかと、これなむこの世の愁へにて残りはべるべければ、論なう、かの後の世の妨げにもやと思ひたまふるを、事のついでではべらば、御耳とどめて、よろしう明らめ申させたまへ。(同)

光源氏への取りなしを、自分の死を以て願う柏木の姿が描かれている。柏木の心内では、密通に對する罪の意識よりも、光源氏への畏怖に重点が置かれ、光源氏の許しを得ることに意識を集中させていることがわかるのだ。「いかなる纒言などのありけるにか」とは、あまりに見え透いた嘘であるが、この嘘から、死に直面した今、無二の親友が相手であつても、真相を語るこのできない柏木の苦悩の奥深さを感じるのである。

最後に、柏木は女二の宮の将来と自分の死により女二の宮を未亡

人にしてしまうことについて、朱雀院への取りなしを夕霧に託し、死に向かつていくのであった。

「泡の消え入るやうにて」(同)と描写される柏木の死は、儚く、無残であるように思われる。女三の宮の虚像を一途に思い続け、その恋に殉じるかのように死を迎える柏木を象徴するには、いかにも相応しい表現であると言えよう。石田穰二氏は、柏木は「叶はざる恋に死んだのだ」と言い切っている。その愛情が純粹であるが故に、死ななければならぬ柏木の存在は、彼の死が現実のものとなると同時に、過酷な運命を全うした英雄として押し上げられ、後の物語に大きな影響を与えていくことになるのである。

(三) 柏木の死とその意義

柏木は自らの内面に、光源氏への畏怖を募らせ、懊悩の果てに死を迎えた。柏木は内面において増殖させた、幻影にも近い光源氏の威光に敗れたのである。内面にのみ根拠を置く死の形として、柏木の死は新しく、独自のものであると言えよう。

密通事件が発覚して以来、柏木だけではなく光源氏や女三の宮も、それぞれ三者三様に苦悩を深めてきた。しかし、結果として、柏木だけが命を落すという悲劇的な運命を辿ることになったのである。運命として、死を受け入れた柏木は、その死後、一転して人々から惜しまれ、愛される存在となる。柏木を取り巻く人々は一様に、彼を哀惜する。女三の宮とて例外ではない。女三の宮は、自分を不

幸に迫りやうた柏木を憎んでいた。けれども、実際に柏木が亡くなつたと聞くと、「さすがにいとあはれなりかし」(柏木)という思いが湧き、愛憐の情を掛けるのである。

また、物語は、残された柏木の近親者と親友夕霧との柏木を哀悼する心の交流を描き、その悲しみを鮮烈に語り上げている。あたかも、柏木の鎮魂曲であるかのようなのだ。そして、「柏木」巻の巻末近くでは、右將軍保忠への哀傷詩を据え、調子高い文章ですべての人に柏木を哀惜させている。

「右將軍が塚に草初めて青し」と、うち口すさびて、それもと近き世のことなれば、さまさまに近う遠う、心乱るやうなりし世の中に、高きも下れるも、惜しみあたらしがらぬはなきもむべむべしき方をばさるものにて、あやしう情をたてたる人にぞものしたまひければ、さしもあるまじき公人、女房などの年古めきたるどもさへ、恋ひ悲しびきこゆる。(柏木)

ここに至つて、柏木は人々の胸に慕わしい英雄像として宿るのである。

そして、柏木の死後、光源氏の彼に対する意識が一変していることも明らかにする。

「あはれ、衛門督」といふ言ぐさ、何ごとにつけても言はぬ人なし。六条院には、まして、あはれと思し出づること、月日にそへて多かり。(同)

光源氏は、これまでの柏木に対する憎悪や嫉妬心を忘れたかのよう、柏木を追悼するのである。このような光源氏の変化は、柏木

が死の直前に予想していたことであつた。女三の宮同様、光源氏もこういった心の動きを、柏木に正確に見透かされていたことになる。ここにおいて、「柏木」巻冒頭の心内語が改めて反芻されるのだ。

物語において、今、これほど柏木が愛されるのは、生前の彼の人が柄がそうさせているというより、作者の強い意図が働いているためだと私は考えるのである。柏木は死後、誰からも哀惜され、人々の心に慕わしい姿で生き続ける存在となる。死への運命を受け入れ、悲劇的な人生を見事に生き抜いた柏木に、作者が大いに感銘しているためであらう。

では、ここまで作者自身から哀惜され、共感を得た柏木の登場とその死の意義について検証したい。

柏木は一般に、女三の宮と密通を引き起こすことから、第一部における光源氏と藤壺の罪に対する応報のために存在すると考えられる。確かに、柏木と女三の宮の密通は、第一部の藤壺事件を念頭に入れたことだろう。しかし、藤壺事件の応報というだけであるならば、柏木があれば過酷な人生を歩む必要もないし、また、死方にしても作者によって技巧的に工夫される必要はないのである。私は、藤壺事件が発覚し、光源氏に破滅という運命がもたらされる可能性を柏木が引き継いだのだと考えている。よつて、柏木には、単なる因果応報によるものではなく、物語の主人公である光源氏が背負い、決して表面化することがなかった光源氏の要素を照射する役割があるのではないだろうか。

柏木は、藤壺事件における光源氏の分身であると言えよう。柏木

はその意味において、光源氏の翳りや破滅を自分自身の生に宿しながら、その悲劇的な生涯を全うしなければならぬのだ。つまり、あの痛々しい柏木の臨終の中にこそ、光源氏の終焉が象徴的に映し出されていたのではないかと考えるのである。

光源氏は、目の前で繰り上げられる柏木の悲劇と向き合うことで、初めて自分の人生を凝視する。そして、柏木の死によって、光源氏はようやく悟りの境地へ歩を進めようとするのである。柏木の死は、光源氏の精神世界を変革させるため、なくてはならない要素であるのだ。

(四) 柏木の準拠について

柏木という人物は、実に様々な面を持ち、柏木像と言っても終始一定したものではなかった。特に、第二部に入ると特徴的な個性が付加され、その個性により柏木は、様々な人間性を見せることになる。よって、作者は、多数の人物を組み合わせた上で、柏木を作り上げたと思われる。その中でも、古注以来、柏木の準拠として、よく名が上げられる藤原保忠・敦忠兄弟のうち、保忠に注目したい。

夕霧によって口ずさまれた「右將軍が塚に草初めて青し」(柏木)という詩句は、『河海抄』に詳しく注が施され、作者は紀在昌、出典を本朝秀句とし、藤原時平の男、八条の右大將保忠の死を哀悼する「天与善人吾不信右將軍墓草初秋」により、物語の季節に合わせ、原詩に「草初秋」とあったのを改めて、「草初青」としたとある。

また、保忠の死は、承平六年七月である。「いと近き世のことなれば」(同)と物語と保忠の死が近接した時代であるとされ、自然、物語の中の柏木と保忠がオーバーラップしてくるのだ。

さらに、保忠と柏木の間には、いくつかの共通点を見出すことができる。二人の間には重なる点が多い。まず第一に、保忠が藤原時平の長男であることから、柏木との間に境遇の類似が見られる。次に、二人とも音楽的方面に卓抜していることが言えるだろう。そして、異常な感情により、死への道を歩むことなどが挙げられる。

こうした類似点を看過することはできないだろう。特に、異常な畏怖を背景に持った内面における感情が、保忠の死の原因となっていることは、柏木の造型という観点から見ると、最も重要なところであると考えられる。藤原時平の子息である保忠が、菅公の崇りを恐れるあまり、薬師経の文句を聞き違えて絶命したという話は、柏木の死を描く上で下敷となったと考えてもよいのではないだろうか。このことから、作者が保忠を念頭に入れて柏木という人物を作り上げ、あの自ら死を招き入れる柏木の性質を生み出したと私は考えるのである。

結 論

第二部の世界に入り、実に個性的な人間像を手に入れた柏木の人生を、垣間見、密通、露顕、死と段階を踏んで辿ってきたのであるが、その人生は一言で言えば悲劇的としか言いようがないもので

あった。

女三の宮への叶わぬ恋に突き動かされる柏木は、「若菜上・下」巻において鮮烈に描き出され、情念の虜と化す彼の言動は、物語の緊張を高めていった。柏木の恋はその情念によつてのみ左右され、現実化への計算など全く成り立たないものであった。そして、密通などという事態に及ぶ気持ちも、柏木の中には存在しなかったのである。

しかし、作者は自らの意図に迫るべく、周到に密通を実現させるため、準備を進めていくのだ。作者の意図するところは、柏木、女三の宮の密通の先にある。因果応報の構造を取りつつ、光源氏をも巻き込んで、登場人物それぞれに精神的苦悩を与えたいのである。そして、そこから彼らの内なる葛藤を人間味溢れる表現で描き出したいのだ。中でも柏木は、甚大な苦悩を味わい、やがて死に至るといふ、あまりにも痛々しい姿で描かれる。柏木の生は、この死のために創作されたと言つても過言ではないのである。

このような過酷な運命に導かれ、悲劇的な死を迎える柏木は、作者によつて、光源氏の暗部を照射し、藤壺との密通により起こり得たかもしれない破滅の道を、光源氏の代わりに歩まされるのだ。光源氏と表裏一体の関係となつた柏木が、自ら死を招き入れ、儚くその命を落としていく姿は、光源氏に精神の深化を促していくことになる。

また、柏木の死は作者によつて技巧的に描かれ、人々の胸に理想的な存在として、その姿が宿ることになった。柏木が死後、人々か

ら称えられるのは、彼の死を貫き通す悲劇性が、『源氏物語』全体の主題である「もののあはれ」に繋がっていくからであろう。

こうした柏木の死であるが、その特徴としては、やはり、その死が内側から描かれたという点にあると言えよう。この点において、柏木の死は新しく、独自性を獲得しており、第二部における主人公と言つてもよいぐらいの存在感を得たのである。これは、何より作者が柏木という人物に、並一通りではない哀惜の思いを寄せた結果であると考えられる。

柏木の死は悲劇的なものであったが、彼はその死を受け入れることによって輝き出し、光源氏にも影響を与える存在となつたのである。

(注1) 同様の考えを伊藤博氏が「柏木の造型をめぐる」(『源氏物語の原点』昭和55年11月10日 明治書院・二六五頁)に述べている。

(注2) 注1参照(二六五頁)

(注3) 玉上琢彌氏『源氏物語評釈第七巻』昭和51年5月10日 角川書店(二五三頁)

(注4) 野村精一氏「若菜巻試論——人間関係の悲劇的構造について——」(『国語と国文学』昭和35年3月・二七頁)

(注5) 注4参照(二七頁)

(注6) 同様の考えを野村精一氏が(注4参照・二五頁)に述べている。

(注7) 野村精一氏「柏木について」〔国文学〕昭和39年5月・四〇頁

(注8) 今井源衛氏「柏木と女三の宮」〔国文学〕昭和34年9月・六〇頁

(注9) 同様の考えを篠原昭二氏が「柏木の情念」〔源氏物語講座第四巻、各巻と人物Ⅱ〕昭和46年8月1日 有精堂出版・一七八―一七九頁に述べている。

(注10) 注4参照(二九頁)

(注11) 柏木・女三の宮の密通事件は偶発事件であるという見解を吉岡曠氏が「柏木の密通と發覺」〔源氏物語の世界第六集〕昭和56年12月25日 有斐閣・二七〇頁に述べている。

(注12) 石田穰二氏「女三の宮と柏木について」〔国語と国文学〕昭和26年12月・三九頁

(注13) 秋山虔氏「柏木の生と死」〔源氏物語の世界第七集〕昭和57年5月25日 有斐閣・一一頁

(注14) 石田穰二氏「柏木の死について―悲劇的なもの―」〔国語と国文学〕昭和28年9月・二二頁

(注15) 注1参照(二六九頁)

(注16) 注1参照(二六九頁)

(注17) 高橋亨氏「源氏物語のへことばと思想Ⅴ」〔源氏物語の対位法〕昭和57年5月10日 東京大学出版会・一二三頁

(注18) 石田穰二氏「柏木の巻について」(注9参照・三三頁)

(注19) 注17参照(一二四頁)

(注20) 玉上琢彌氏『源氏物語評釈第八巻』昭和50年6月10日 角川書店(二三頁)

(注21) 『日本古典文学全集 源氏物語四』平成8年11月10日 小学館(一九頁頭注)

(注22) 石田穰二氏「源氏物語における四つの死―歌語のことなど―」〔学苑〕昭和36年11月・五頁

(注23) 第二部における柏木の造型は、菅公の崇りにより早逝する時平の子息のイメージを根拠にしているという見解を、土方洋一氏が「源氏物語の言語の構造・序説―テクスト論の視座から」〔国語と国文学〕昭和56年6月・四五頁に述べている。

○『源氏物語』本文の引用は、『新編日本古典文学全集』(小学館)に拠った。

○本稿を成すにあたり、御指導賜った西木忠一先生に篤く御礼申し上げる。

和歌山大学大学院
教育学研究科
国文学専攻修士課程